

## 一写本の運命

原野 昇

羊皮紙に書かれた中世の写本は、その1冊の書写、作成に膨大な時間がかかる。そういう意味では1冊1冊かけがいのない貴重な書物である。しかし作成されてから今日まで数百年～千年という長い年月を経過するうちに失われてしまった写本の数も多い。運よく図書館に収蔵されても、その間に意図的に破棄または焼却されたり、戦争や火災、地震や洪水のような自然災害などで、この世から消えていった写本の数も膨大である。1904年に発生したトリノ国立図書館火災のことについてはほかで書いたことがあるのでここでは繰り返さないが、ごく最近の出来事として、去る2009年3月3日、ドイツ・ケルン市立歴史文書館 Historisches Archiv der Stadt Köln の建物が突然倒壊した。自治体の文書館としてはアルプス以北最大のものであるこの歴史文書館は、過去千年以上にわたる貴重な史資料を所蔵し、証文書 65,000 点（最古のものは922年）、地図や図面 104,000 点、遺品や遺稿 780 点、の総分量は書架にして延べ26kmの長さにおよぶと言われている。幸いその大半の資料は救出、保全されるようであるが、破壊された資料も少なくないそうである。

フランス中世文学作品のなかでも、特にジャンルの問題を考える上で貴重と言える作品に『シャルルマーニュの巡礼』というのがある。この作品を伝える唯一の写本は大英博物館図書館に1879年までは存在していたが、その年に行方が分からなくなって以来、今日まで見つかっていない。1836年に刊行されたフランシスク・ミシェル Francisque Michel の校訂本、さらに、たまたまその写本の逸失と同じ1879年の12月に、エードゥアルト・コシュヴィッツ Eduard Koschwitz が写本にかなり忠実な校訂本を刊行していたので、幸運にもこの作品を今日でも鑑賞することができる。

当該写本（大英博物館図書館 Old Royal Collection 16 E. VIII 番）は1879年6月7日土曜日、ある一人の利用者によって同図書館閲覧室で利用され、夕刻返却されて以降、その行方が杳として不明となっている。その写本の所在が不明となったことが、1879年6月23日に同図書館の担当者によって正式に報告されたが、盗難届や被害届のような正式な手続きは当局に対してなされなかったようで、その後司直の手によって究明されることはなされていない。文献学史上重要なかつ謎の多いこの出来事は、研究者による真相解明への努力が今もなお続けられている。先頃カルラ・ロッシ Carla Rossi は長年の

追跡調査の最新の結果を *Romania* 誌上に発表した。以下ロッシの報告の全文を翻訳して紹介したい。(以下の翻訳は著者および *Romania* 誌編集責任者による本誌への翻訳出版許可を得たものである。原文で *British Museum* となっている場合「大英博物館」、*British Library* となっている場合「大英図書館」と訳してある。【 】内は訳者による補足。)

\*\*\*\*\*

Carla Rossi, A Clue to the Fate of the Lost MS. Royal 16 E VIII, copy of the *Voyage de Charlemagne*, in *Romania*, t.126 (2008), pp.245-252.

カルラ・ロッシ 『シャルルマーニュの旅行』の失われた Royal 16 E VIII 番写本の運命の謎を解く手がかり」(『ロマニア』126 巻, 2008 年, 245-252 ページ) (原野 昇訳)

アングロ・ノルマン語で書かれた、シャルルマーニュと彼の 12 臣将の空想的な聖地巡礼を語った風刺的な作品は、大英博物館に所蔵されていた 13 世紀初頭に作成された一写本(旧王室コレクション, 16 E. VIII 番)のみで伝えられていた。当該写本は 1879 年 6 月 7 日土曜日、ある一人の利用者によって返却されて以降、その行方が不明となっている。

そのとき、当該写本は何冊かの印刷本と混ざってしまった可能性がある。ある者は、それは図書館のどこかに今でも存在し続けていると言い、他の者は、盗まれてしまったと主張している。

シャルルマーニュ大帝の仮想遠征を歌った当該作品は、母音押韻(半諧音)の 870 行からなり、19 世紀の多くのフランス人研究者は、フランス最古のシャンソン・ド・ジェストであると考えている。その校訂本は 1836 年にロンドンでフランシスク・ミシェルによって初めて出版された。ドイツの文献学者エドゥアルト・コシュヴィッツが、より詳細な注釈と考察を加えて、再度校訂を行った。ギュスタフ・テュロが 1907 年にその第 5 版を、1913 年に第 6 版を出版した<sup>1)</sup>。最初の校訂版【ミシェル版】は再構された批評版テキストのみであったが、後の版【コシュヴィッツ版】は消えた大英博物館写本の原典テキストが再現されている。

筆者は『失われた「シャルルマーニュの旅行」写本』<sup>2)</sup>を出版し、そのなかで、当該写本の大英博物館からの謎に満ちた消失は、普仏戦争の文化面での不幸な遺産だということを示唆した。当時、ドイツは国民のアイデンティティを確立しようと必死になっており、ライン河をはさんだ両側の学者たちは、それぞれの優越性を主張するためにあらゆる手段に訴えようとしていた。

筆者は大英図書館の中央古文書室の古記録原簿集(1879 年 1 月 1 日-1879 年 6 月 27

日)を調査していて、大英博物館首席司書エドワード・マウンド・トンプソン Edward Maunde Thompson 氏の、王室写本 16 E. VIII 番の閲覧室における紛失に関する覚書を発見した。この覚書によると、当該写本が誤って書庫に運ばれたのかも知れないと思われ、印刷本の間を探す作業が 1879 年 6 月 9 日月曜日にただちに行われたが、そこにはその跡形もなかったということである。

事実として述べておかなければならないが、大英博物館の閲覧室が公開された当初から、許可を得ていない者の入室を防ぐことが困難であることが大きな関心事であった。閲覧された図書のページが切り取られているのが見つかったりしたのである。印刷本監視系の推測では、閲覧者が図書をトイレに持って行って、そこでページを切り取ったのだらうとのことである。すべての閲覧者に閲覧室への入室許可証の提示が求められるようになり（この措置は閲覧者の抗議によって後に大幅に変更された）、閲覧室を巡回して窃盗を見張る警察官が雇われたのは 1873 年のことである。万一の事態に備えて採られたこのような数々の措置にもかかわらず、中央閲覧室における写本の利用状況は、写本を大きな危険にさらし続けていた。王室写本 16 E. VIII 番はまるごとそっくり消え失せたのである。そして 1879 年 6 月 23 日に、コレクションからの紛失が公式に宣言された。

マウンド・トンプソン氏の覚書の中の記述で重要な第二の点は、当該写本を最後に閲覧した人の名字がローテ Rothe であったということである。残念ながらマウンド・トンプソン氏は大英博物館図書部長宛の手紙の中で、このドイツ人研究者の下の名前を書いていない。この謎の人物ローテ氏とはいったいどのような人物なのだろうか。大英図書館写本室長のジャスティン・クレッグ Justin Clegg 博士も、古文書保管係のジョン・ホブソン John Hopson 氏も、この閲覧者に関するより詳細な情報を筆者に提供することはできなかった。その答を得るために、筆者は大英博物館の閲覧室利用者台帳の 1870 年から 1879 年までを調査した。その台帳の中で利用券を取得したローテという名前の人はただ一人のみであった。その人の名前はアウグスト・レオポルド August Leopold と言い、1876 年 10 月に初めて利用券を取得している。

大英博物館古文書部長のクリストファ・デイト Christopher Date 氏は数年前筆者宛の手紙の中で次のように書いている。「・・・残念ながら、各閲覧者が大英博物館古文書部の中のどの資料を利用請求したかについては、いかなる情報も持ち合わせていません。われわれの手元にあるのは、各閲覧者の利用券取得申込書とその一覧表のみです。大英図書館によれば、閲覧者による資料の閲覧請求書は保存されていないということです。」

以上のことから言えることは、ローテ氏はさまざまな機会にしばしば閲覧室を利用

したであろうこと、しかし彼の利用が記録されているのは、利用券の更新が必要であったときのみである、ということである。

マウンド・トンブソン氏からの手紙によると、アウグスト・レオポルド・ローテ氏はゴダルミング・チャーターハウス学校 Godalming Charterhouse School【英国サリー Surrey 州】にポストをもっていたことが分かる。そこで筆者の調査はサリー州に移った。チャーターハウス学校の 1872-1900 年の古記録によれば、アウグスト・ローテ氏は 1875 年の秋学期から 1879 年の春学期まで「助教諭 Assisant Master」であった。彼は近代言語部門の「若手スタッフ」として名前が出てくる。同校の古記録にローテ氏の生年月日の記述はない。アウグスト・レオポルドは 1879 年春に最後の報酬を受け取っている。ということは、ローテ氏が同年 6 月 7 日に当該写本を閲覧したときには、同校で教えることをすでに辞めていたということになる。

この日以降、当該写本と同様に、このドイツ人紳士の足跡も消えてしまったようにみえる。このドイツ人の先生は、どのような理由でかくも頻繁に大英博物館の閲覧室を訪れたのだろうか。写本に関心があったのだろうか。彼はどこで勉学したのだろうか。そして 1879 年 6 月以降は何をしていたのだろうか。この紳士に関する調査は、イギリス、ドイツ、オーストリア、イタリアにおいて何年もかかった骨の折れる仕事であった。

筆者の調査の結果、次のようなことが明らかになった。アウグスト・レオポルド・ローテ氏は 1852 年 9 月 16 日にドイツのブルクシュタインフルト Burgsteinfurt で、中流階級の両親、カール・ユーリウス・ローテ Karl Julius Rothe 氏とアンナ・プリューメルス Anna Prümers 夫人との間に生まれた。20 世紀初頭に地方政庁が再編され、ローテ氏が生まれた町はボルクホルスト Borghorst の町とともに、新しいシュタインフルト市に吸収合併された。筆者は県の公文書館の記録を詳細に調査し、ローテ氏の家系図を再構築した。その結果ローテ氏の家系は、アルザス出身の文献学者ルドヴィヒ・アウグスト・ローテ Ludwig August Rothe (1795-1879 年) とは直接の親戚関係はない、ということが判明した。

この青年の文化的背景を知るために、彼の学歴を調べることが不可欠である。シュタインフルト市の名門高等学校の一つはアルノルディーヌム Arnoldinum 校である。同校は 1588 年に創立され、特に 19 世紀には、ブルジョワ階級の子弟が通っていた。筆者は、アウグスト・ローテ氏が同校で勉学したのではないかと期待しただけでなく、1 世紀半前の同校卒業生の記録も保存されていることを期待して、同校の事務室に勤務するアルベルト・レーザー Albert Röser 氏と連絡をとった。

筆者の予想は的中した。「アウグストは 1862 年の復活祭にギムナージウムの第 1 学

年に入学を許可され、1872年の復活祭に卒業資格試験 *Abitur* を受けた。」アウグスト・ローテ氏は同校に10年間通い、ラテン語、ギリシア語、歴史、フランス語の古典教育を受けたのである。そして1872年に卒業試験に合格すると、彼の進むべき進路をよく心得ていたことは明らかである。1872年の「学籍名簿」に、彼の名前の後に、「ハレ・アン・デア・ザーレ Halle a. d. Saale で近代文献学の勉学を希望」と書いてある。彼はハレ大学で近代文献学を学ぶことを決めたのである。

同大学は親切にも同大学の古記録を筆者に見せてくれた。それで筆者は、アウグスト・ローテ氏が1872年4月20日から1874年10月20日までの期間に聴講した授業について知ることができた。ロマンス文献学に関してはフーゴー・シューハルト Hugo Schuchardt とエドゥアルト・ボーマー Eduard Bohmer の生徒であった。

筆者の調査によると、当時の一般的な学生のように学位請求論文 *Dissertationsarbeit* を出版して卒業するというのを、彼はハレ大学でもドイツの他の大学でもしていないようである。1875年、23歳のとき、彼はイギリスに渡り、チャーターハウス校のドイツ語教師の職を得た。彼は1879年春までゴダルミング市のピーパーハロー通り Peperharow Road の簡素な家に住んでいた。その頃イギリスで彼は若きプロシア人ヨーン・コッホ John Koch に出会っている。コッホは当時エドゥアルト・コシュヴィッツと一緒に研究していた。コシュヴィッツはアングロ・ノルマン語によるシャルルマーニュのエルサレムおよびコンスタンチノーブルへの旅行の批評校訂版の出版を準備していた。コシュヴィッツのためにコッホは当該写本のテキストの古文書学的転写 *diplomatic transcription* を受け持っていた。

1879年は鍵となる年である。同年に、Royal 16 E. VIII 番写本は大英博物館の閲覧室から消え失せた(6月7日)。アウグスト・ローテ氏は仕事を辞めゴルダミングを離れている(春)。ヨーン・コッホ氏の大英図書館での仕事が終りに近づいていた(大英博物館の古記録から判断すれば、やはり春)。さらにエドゥアルト・コシュヴィッツの校訂本が同年に刊行されている(年末)。これらすべてのことは単なる偶然の一致であろうか。

閲覧室に入るためには各自利用券を手にする必要がある。ということは、(当該写本は故意に持ち去られたと仮定して)当該写本を盗んだ人の名前は閲覧室利用者名簿に記載されているはずである。帳簿には1879年6月7日に利用券を更新した人8人の名前が残っている。そのうち7人はイギリス人であり、残る1人はドイツ人でエマ・グレーター Emma Graeter という名前の人である。

写本を借り出したことのある人は誰でも、司書たちがどのような交代制で仕事をしているかを知っている。午後5時ころ1つのチームの仕事が終り、別のチームが仕事

を開始することが分かっており、ほとんどの図書が、「特に土曜日はそうであるが、午後5時と6時の間に返却される」ということも知っている。そして「返却された図書は閉館時刻までカウンターの上に置かれたままで、[...] 閉館後に別の司書によって移動される」ということも。なぜ司書の誰一人アウグスト・ローテ氏から当該写本を受け取ったという記憶がないのであろうか。マウンド・トンプソン氏による事件の再現によれば、確かなことは、当該写本が消えたのは閲覧室からであるということ、そして「閉館時間前後の[...] 混雑と混乱のせいで、カウンターの上から当該写本を誰にも見られずに持ち去ることは不可能ではない」ということである。

ローテ氏は短い大学在学中、主としてロマンス文献学を学んだということになってはいるが、彼がこの分野で何らかの研究成果を公刊した痕跡はない。彼は1898年に出版された、イギリス人生徒用の簡単なドイツ語会話の入門書を著している。(彼と同国人のヨーン・コッホ氏は、イギリス人生徒用のフランス語とドイツ語の教科書をたくさん出版している。) この頃ローテ氏は学生時代よりもより頻繁に大英博物館の閲覧室を利用している。おそらく彼はRoyal 16 E. VIII 番写本に含まれているいずれかのテキスト、あるいは他の写本のテキストについて学位論文を準備していたのではないかと思われる。確かなことは、彼はこれらの研究を完成させることはなかったということである。仮定として言えることは、1879年以降もかなり長期間にわたってローテ氏はイギリスでドイツ語を教え続けたであろう、ということである。

彼が大英博物館で当該写本を閲覧した時と、アニー・エドワーズ Annie Edwardes 嬢とサリー州のモンズレイ Monseley で結婚した時との間に17年間の空白がある。彼女は彼よりも20歳年下である。彼女は母方の家系を通して、イギリスで最も有名な中世写本収集家の一人ヘンリー・ホープ＝エドワーズ Henry Hope-Edwardes と親戚である。ローテ夫妻の間には、1899年にエレナーEleanor、1903年にフロレンス Florence という二人の娘が生まれた。二人ともサリー州で生まれている。

20世紀の初頭、アウグスト・ローテ氏は家族とともにイギリスを離れ、今日ではオーストリアに属するブレーゲンツ Bregenz に移住した。1926年にはオーストリアを離れ、妻と二人の娘が住んでいたイタリアのメラノ Merano で合流し、そこで4年間過ごした。この地で彼は1933年に亡くなったが、彼の死とともに、1879年6月7日の午後起こったこと、ロンドンの大英博物館の閉館時刻のころRoyal 16 E. VIII 番写本が消えて以来ずっと見つかっていないこと、に関する真実も墓場にもっていかれてしまった。

もちろん本稿の目的は、19世紀の一閲覧者（ローテ氏）や几帳面な校訂者（コシユ

ヴィッツ氏)の信用を失墜させようとするものではない。当該写本は故意に盗まれたのであるということをはっきりと成功したとしても(繰り返しておくが、現時点までに得られた証拠ではそのことを証明することはできない)、その場合、その盗みの理由は単なる金銭目的のためでは決してなく、政治的な敵でもあった文献学上のライバル(フランス人)に対する一種の文化的ゲリラ行為であった可能性の方が高いということである。

一つのちょっとした不正行為が、今日で言う文化的ゲリラ行為となってしまったという可能性は否定できない。すでに以前述べたことがあるように、当時ドイツの文献学者とフランスの文献学者との関係は、強烈なイデオロギーの対立によって毒されていた。もしも当該写本が1世紀以上前のあの日の午後ロンドンで盗まれたのであれば、今日どこかの個人コレクションの中にあるはずである。筆者はヨーロッパおよびアメリカ合衆国の公的機関の蔵書をかなり丁寧に調査した。その結果筆者は固く信じるものであるが、当該写本またはその一部がその後公的な図書館や博物館によって取得されたという可能性は排除できる。スコットランドヤード(ロンドン警視庁)のデイヴィッド・ケイパス David Capus 氏が筆者に証言してくれたが、残念なことに大英博物館は当該写本の紛失を当局に公式に報告していない。

拙著の出版後も筆者は Royal 16 E. VIII 番写本に関する調査を進めてきた。不幸にも19世紀初頭には未だ中世写本はマイクロフィルムに保存されていなかった。今日まで研究者は、失われた当該王室写本の唯一の図版は、1834年にフランシスク・ミシェルが手書きした『シャルルマーニュの旅行』のテキストの最初の10行のみだと思っていた。その転写は、リヒャルト・パウル・ヴュルカー Richard Paul Wülcker がエドゥアルト・コシュヴィッツに宛てた手紙によれば、それほど正確ではないようである。『シャルルマーニュの旅行の歌』の写本は、規則正しく丁寧に書かれており、ミシェル版のファクシミリに再現されているように揺れたり歪んだりしていないということである。

筆者はこの謎解きのもう一枚の札を持っている。筆者は、当該写本を部分的に転写したものが他にありはしないかと、最近大英図書館で調査した。そうしたところ幸運にも、トマス・ライト Thomas Wright が当該写本のなかに含まれていた細密画をコピーして引用しているのを発見した。(図版参照)それは彼が1871年に Trübner & Co. から出版した『昔の家庭—太古から近代までのイギリスにおける家庭生活およびその精神生活の歴史』という本の中で、格別に興味深い絵、として引用しているものである。事実これは特殊な絵なので、写本から切り取られた細密画の一つとして他の細密画と並んで、どこかの博物館で展示されていたならば、見逃されるはずはないと思う。



筆者はヨーロッパおよびアメリカの主要な競売業者に連絡し、Royal 16 E. VIII 番写本の本体あるいはその一部、特に上の細密画を競売にかけたことがあるかどうかを尋ねた。しかし筆者が受け取った回答はすべて同じで、彼らのデジタル化されたカタログの中に、当該写本全体もその一部さえもまったく痕跡が残っていない、というものであった。しかしながらこのことをもってして、当該写本が今日どこかの個人コレクションの中に存在しているという可能性を排除するものではない。ただし強調されなくてはならないことであるが、大英博物館から持ち出されたものはいかなるものであれ、法律上、その後改名された現在の大英図書館に返却されなければならないということである。

今日までに筆者によって明らかにされたことが、将来何らかの役に立つことを切に期待する次第である<sup>3)</sup>。

カルラ・ロッシ  
チューリッヒ大学およびフライブルク大学

.....  
補 遺 【エドワード・マウンド・トンプソンからボンドに宛てた報告書】

写本室にて、1879年6月23日

親愛なるボンド Bond 様

残念ながら一つの写本の紛失についてご報告しなければなりません。それは旧王室コレクションのなかの Royal 16 E. VIII 番写本です。それは八ツ折り版の写本で、13世紀のフランス語の次のような作品が含まれているものです。ギヨーム・ド・ノルマンディのフランス語版韻文動物誌、ティトウスとヴェスパシアン、シャンソン・ド・ジェスト、シャンソン、シャルルマーニュのエルサレム旅行、その他の小品。シャルルマーニュの旅行は当該写本が唯一写本であり、当該写本が格別重要な写本であるの



もこの作品が収録されているからです。

当該写本は今年7日土曜日に、チャーターハウス校に教職をもっていたドイツ人紳士ローテ氏によって閲覧されました。

閲覧室で閲覧された写本は一日の閉館時には写本室に持って来られます。翌朝まっ先にそれらの写本はしかるべき棚に戻されます。今年7日土曜日に返却された写本も同様に処理されました。しかし月曜日の朝、各棚に戻す前にそれらの【土曜日に】返却された写本を帳簿と照合した際、Royal 写本がそこにありませんでした。当該写本が、時たま起こるように、間違って印刷本図書室の方に運ばれたのかも知れないと思って、印刷本の間の探索をただちに開始しました。しかし、そこをいくら探しても当該写本は見つかりませんでした。その前に私は、帳簿との照合が行われる前に当該写本が移動させられたかも知れないと思って、写本室を調べさせていましたが、そこでも見つかりませんでした。当該写本は閲覧室で無くなったものと私は思います。写本室の係員が請求された写本を閲覧者に届けますが、それらの写本の返却を受け取って利用券を返すのは閲覧室付きの係員がします。私はローテ氏に会って聞きました。彼はその土曜日に3冊の印刷本と当該王室写本を返却した、と言いました。その時それらを受け取った係員が彼に、写本も持って来たか、と尋ねたので、彼はその写本に指で触れて、これだ、と示したそうです。そしてその後利用券を受け取った、と彼は言いました。翌週の月曜日に彼は当該写本を再び請求しました。その時にはその写本は見つかりませんでした。彼はその写本を返却した時間は5時ころだったと言いました。係員の誰もローテ氏が返却した図書を受け取ったときの状況を記憶している者がいませんでした。またローテ氏も、どの係員に返却したかを覚えていませんでした。しかし聞いたところによると、5時から6時にかけては、特に土曜日には、非常に多くの図書が返却されるということです。また、5時前後に係員が交代します。返却された本は、配架に慣れた係員がそれらを元のしかるべき棚に戻すまで、カウンターの上に置かれたままだということです。1日の閉館時の部屋の中央の混雑と混乱のなかでは、当該写本を誰にもとがめられずに持ち去ることは不可能ではなかったであろうということです。

当該写本がこのようにして失われたのではないかと心配しています。とはいえ私は当該写本が、図書館の印刷本のどこかわれわれの探索が及んでいない所に紛れ込んでいるという望みを未だ捨ててはいません。

私を信じてください

敬具

エドワード・マウンド・トンプソン

## 注

1) Francisque Michel ed., *Charlemagne, an anglo-norman poem of the twelfth century*, London-Paris, 1836 ; Eduard Koschwitz ed., *Karls des Grossen Reise nach Jerusalem und Constantinopel, ein altfranzösisches Heldengedicht des XIten Jahrhunderts*, Heilbronn, 1880 (しかし 1879 年末にはすでに入手可能であった) , 1883, 1895, 1910.

2) Carla Rossi, *Il manoscritto perduto del 'Voyage de Charlemagne'*, Rome, 2005.

3)本稿を終えるにあたり、プレスコット A. Prescott 教授とラシエル・ストックデイル Rachel Stockdale 大英図書館写本部門部長の、過去 8 年間にわたる筆者へのご支援に対し、深甚の謝意を表す。また、大英図書館職員が、財政的に厳しい状況下にあるにもかかわらず、質の高いサービスを提供し続けていることに対し、深い敬意を表す。

\*\*\*\*\*

(追記)

訳者は上記論文で触れられていないいくつかの点について、著者カルラ・ロッシ氏に直接質問してみた。

まず図書館利用券の更新についてであるが、更新は毎年必要だったとのことである。たとえばヨン・コッホは 1876 年 4 月 18 日, 1877 年 3 月 23 日, 1878 年 4 月 17 日と、3 年間連続して【取得・】更新しているそうである。

次に、閲覧室利用者名簿によると、1879 年 6 月 7 日に利用券を更新した人 8 人の名前が残っており、そのうちの 1 人のみがドイツ人で、「エンマ・グレーター Emma Graeter という名前の人である」とあるが、そのグレーターについての調査はどの程度なされているのかを尋ねたところ、1911 年の【イギリスの】国勢調査では Emma Graeter という名前は見つからないこと、研究資金の枯渇が原因で調査は中断しており、現段階ではグレーターの当時の身分、前歴など詳細は不明であるが、著名なドイツ人文献学者フリードリヒ・ダヴィッド・グレーター Friedrich David Graeter の姪または孫である可能性があるとのことである。さらに著者は、エンマ・グレーターがコシュヴィッツの協力者ヨン・コッホと何らかの関係があった可能性も示唆しており、文面から、エンマ・グレーターがこの件の鍵を握る重要な人物と認識していることが伺える。

上に訳出した論文は、氏の 11 年間におよぶ追跡調査の一応の到達点のようである。